

## 平成27年度事業報告

### 1. 会議の開催について

#### (1) 理事会の開催

第1回 平成27年 6月 9日

第2回 平成28年 3月18日

#### (2) 常務理事会の開催

第1回 平成27年 9月11日

第2回 平成27年11月30日

#### (3) 評議員会の開催

第1回 平成27年 6月24日

### 2. 事業の実施について

自主研究

○医療政策研究会（Ⅱ）

- (1) 『院内事故調査実践マニュアル』出版のための院内事故調査と第三者機関の関連図の検討  
平成27年 4月14日
- (2) 『院内事故調査実践マニュアル』出版のための医師法21条との関係及びフローチャートの検討  
平成27年 4月21日
- (3) 『院内事故調査実践マニュアル』出版のための1～4章最終原稿検討  
平成27年 5月 6日
- (4) 『院内事故調査実践マニュアル』出版のための1～7章最終原稿検討  
平成27年 5月19日
- (5) 『院内事故調査実践マニュアル』出版のための5～7章最終原稿検討  
平成27年 5月26日
- (6) 『院内事故調査実践マニュアル』出版のための8、9章最終原稿検討  
平成27年 6月 9日
- (7) 『院内事故調査実践マニュアル』出版のための10章最終原稿検討  
平成27年 6月17日
- (8) 『院内事故調査実践マニュアル』出版のための11、12章最終原稿検討  
平成27年6月23日
- (9) 『院内事故調査実践マニュアル』の出版本の表紙及び内容の総点検  
平成27年 8月 6日
- (10) 『院内事故調査実践マニュアル』の出版本の送付先の検討と決定  
平成27年10月 7日
- (11) 『院内事故調査実践マニュアル』を使った研修会の企画  
平成27年10月26日
- (12) 『院内事故調査実践マニュアル』を使った研修会の企画

平成27年12月 1日

10年来の検案事項となっていた医療事故調査制度が法制化され、平成27年10月に施行された。それに合わせて、これまで研究会で出版した『院内事故調査の手引』を全面的に改訂し、『院内事故調査実践マニュアル』として出版した(別紙1)。

また、それに基づく研究会ができるように企画案を練った。

○高齢者、障害者などの生存に関わるユニバーサル・ヘルス・ケアと福祉・社会保障の研究

- (1) Thailand Community Network Appraisal Program (TCNAP) –タイの地方自治改革の中の、地域保健活動とユニバーサル・ヘルスの大きな流れについて–

平成27年 9月 5日

タイ・コンケン大学看護学部 カニタ・ヌンタボット

- (2) 地域作り型保健活動と社会倫理等

平成27年11月27日

元国立保健科学院研修部長

岩永 俊博

- (3) 地域における高齢者等のユニバーサル・ヘルスの新動向について

平成28年 1月29日

前島根大学副学長・日本健康福祉政策学会理事長

塩飽 邦憲

- (4) 高齢者等のターミナル・ケアを含むガンのユニバーサル・ケア(がんセンターの見学)患者の尊厳調査の国際比較

平成28年 2月 5日

名古屋大学大学院医学系研究科看護学専攻

太田 勝正

- (5) 健康体力づくり(フィットネス)としてのUHC(ユニバーサル・ヘルス・ケア)

平成28年 2月12日

公益社団法人 日本フィットネス協会 業務執行理事

深代 泰子

- (6) 日本の地域におけるユニバーサル・ヘルスとしての保健活動・保健師と倫理等の国際的動向

平成28年 3月11日

前豊田看護大学講師

鈴木 千智

- (7) 地域情報学から見たUHC

平成28年 3月26日

京都大学地域研究統合情報センター所長

原 正一郎

- (8) 老成学の構想

平成28年 3月30日

浜松医科大学哲学

森下 直貴

概要：本研究の目的は、国内のみならず国際的に増大している高齢者、障害者等の生存に関わるユニバーサル・ヘルス・ケアの動向を、総合的に捉えることにある。3年度は、1-2年度で構築した研究体制を維持し、国内外の関連情報の収集と生存科学との関連性の分析を続けた。

国内では、参加型の地域保健活動(岩永)、先進地域での日本人高齢者の遺伝的特性を踏まえた健康維持や住宅などのソーシャルキャピタル(塩飽)、がんとターミナルケア(静岡がんセンター)、体力づくり(フィットネス)とUHC(深代)、地域UHCとしての保健師の地域保

健情報と倫理(鈴木)、情報学と UHC(原)、老成学という新しい視点からの UHC(森下)など、幅広く日本の UHC に関わる事象を、わが国の高齢者、障害者の保健福祉制度とその意味するところを過去・現在・将来という時間軸で捉え、精査した。

また、海外のユニバーサル・ヘルス・ケアに関する動向が意味するところを、タイ国における地方自治改革としての UHC という大規模な展開（タイの全自治体の 1 / 3 にまで拡大中）（カニタ）から、予想以上に動きが早い世界の動向を検討した。更に、前年度の英国のアン・ギャラガーによる報告から高齢者や障害者では、社会制度に加えて「尊厳」が大きな意味を持つことが理解されたことから、患者の尊厳に関する国際比較調査(太田)という新しい指標づくりが意味するところについても、検討した。

UHC は、国民皆保険のような社会保障、経済的な制度として捉えられることが多いが、実際は、人々の生活の質に関わる多様な要素が関係する。本年度の研究会で明らかとなった要素は、1. 健康を維持、増進する上で必要な地域における住民の参加のあり方が、「日常性の断絶」ということで、昨年度の報告の災害時の高齢者・障害者の UHC などに共通すること、2. 遺伝からソーシャル・キャピタルなどの生物学的・社会的な特性までを視野に入れた地域の政策の必要性、3. 初年度で提起されたような人生の最後に関係するターミナル・ケアのあり方、4. 高齢者・障害者に必要とされる健康・体力づくりは、スポーツとは一線を画す「フィットネス」という新たな方法でありその体系化や社会制度の拡充の必要性、5. 情報の共有を巡る地域保健・福祉活動の倫理という側面、6. 情報化社会におけるビックデータなどの地域情報の UHC における扱い方、そして、7. 高齢化などの社会変化の実相を正確に把握しうるような新たな哲学的視点としての「老成」、8. 世界における UHC 実現のために必要とされる健康福祉分野の住民参加と地方自治改革との関係性、9. 高齢者・障害者に必要とされる「尊厳」の把握方法、などである。

本研究を通じて、グローバル化が進展し、変動する社会経済環境を、社会医学・保健科学・看護学・情報科学・社会学など、多角的な視野から検討し、人類の福祉・社会保障環境など生存科学に関する研究を推進する糸口を見出した。

○動物の社会構造における精神疾患関連行動の意義

(1) グループ飼育されているニホンザルとマウスを用いたドーパミン機能の社会的影響解明に向けた実験

平成 27 年 4 月 1 日～平成 28 年 3 月 31 日

京都大学霊長類研究所准教授

後藤 幸織

大邱カトリック大学食品栄養学科助教

李 英娥

京都大学霊長類研究所後期博士課程

山口 佳恵

概要：本研究では、ニホンザルとマウスを動物モデルとして、ヒトの社会行動ならびに精神疾患を進化論的視点から解明を試みるものである。集団飼育下のニホンザルとマウスを用いて、そのうちの 1 頭にドーパミン受容体の 1 つである D1 受容体の阻害薬を慢性投与することにより誘起される行動変化が、集団内の動物の社会関係性ならびに社会構造（社会階級など）にどう影響するか調査した。その結果、D1 受容体機能の抑制により、マウスで

は投薬個体の集団内の社会的順位が上昇するなどの利益的变化が見られた。一方、ニホンザルでは、明確な不利益的な変化は観察されなかったが、投薬個体の社会的順位の変動は見られなかった。このことから、種によって集団の社会的順位の構築は異なるメカニズムによることが見出された。また、この研究結果から、ある社会的文脈においては、精神疾患と関連するような脳機能の異常(D1 受容体機能の低下)は必ずしも進化の過程で淘汰されない可能性が示唆される。

○児童虐待に対するソーシャルワークの国際比較研究会

(1) 児童保護政策におけるリービングケアに関する国際シンポジウム “International Social Work Discussion” の開催

平成 27 年 10 月 21 日 (川崎医療福祉大学 4001 号教室)

ロンドン大学 博士 (児童家庭ソーシャルワーク及び政策)	Emily Munro
YMCA せとうち代表理事	太田 直宏
川崎医療福祉大学 教授	熊谷 忠和
川崎医療福祉大学 講師	直島 克樹
川崎医療福祉大学 講師	Tim Cleminson

(2) 子育て支援やリービングケアに取り組んでいる幸重社会福祉士事務所ヒアリング

平成 27 年 10 月 22 日 (京都市山科区 幸重社会福祉士事務所)

幸重社会福祉士事務所代表 (ヒアリング)	幸重 忠孝
ロンドン大学博士 (同行者)	Emily Munro
川崎医療福祉大学 教授	熊谷 忠和
川崎医療福祉大学 講師	直島 克樹
川崎医療福祉大学 講師	Tim Cleminson

(3) 里親支援サービスを展開する Bethany Christian Services ヒアリング

平成 28 年 3 月 21 日 (ミシガン州ホーランド Bethany Christian Services)

川崎医療福祉大学 講師	直島 克樹
-------------	-------

(4) グランドバレー州立大学で児童保護に関するソーシャルワークの専門家である George Grant 教授との意見交換

平成 28 年 3 月 22 日 (グランドバレー州立大学: ミシガン州グランドラピッツ)

川崎医療福祉大学 講師	直島 克樹
-------------	-------

(5) 児童施設 (ST. JOHN' S) のプログラムディレクターである Renee M. Orr 氏とセラピストの 2 名へのインタビュー

平成 28 年 3 月 22 日 (ミシガン州グランドラピッツ)

川崎医療福祉大学 講師	直島 克樹
-------------	-------

(6) パーマネンシープラン検討会 (ケントカウンティ裁判所) の傍聴

平成 28 年 3 月 23 日 (ミシガン州グランドラピッツ)

川崎医療福祉大学 講師

直島 克樹

(7) イリノイ大学ジェーンアダムス記念館 (ハルハウス) 視察

平成 28 年 3 月 25 日 (ミシガン州グランドラピッツ)

川崎医療福祉大学 講師

直島 克樹

概要: (1) のシンポジウムは平成 27 年 10 月 22 日に“International Social Work Discussion”として本研究会メンバー、川崎医療福祉大学医療福祉学科ソーシャルワーク教員、YMCA の留学生など 30 名程度の参加のもと、川崎医療福祉大学 4001 教室で行われた。シンポジストはモンロー博士、「YMCA せとうち」太田直宏代表理事そして本研究会研究員直島克樹講師 (川崎医療福祉大学) の 3 人とした。また本研究会委員の Tim Cleminson 講師 (川崎医療福祉大学) は語学監修としてコーディネーターを担った。シンポジウムではモンロー博士から、「Children welfare : research, policy and practice」と題し英国における児童保護の現状とリービングケア：成人への移行ケア～国際比較の視点からの報告があった。太田直宏氏からは、「YMCA せとうち」の児童に対する活動全般についての説明から始まり、ファミリーホーム「操山寮」の管理者である立場から、その立ち上げの経緯、現状までの詳細の報告、また個別事例の関わりからファミリーホームの課題と今後の展望についての報告があった。直島克樹本研究会研究員からは、本研究会のこれまでの取り組み経過を報告した上で、わが国のこどもの貧困、児童虐待、児童保護政策の現状、さらにはわが国におけるリービングケアの現状と課題そして展望についての報告があった。(2) では、わが国のリービングケアにおけるソーシャルワーカーの取り組みとして、先進的に取り組んでいる幸重社会福祉士事務所 (京都) にモンロー博士と本研究会研究員 (熊谷、直島、Cleminson) が訪ね、幸重忠孝代表にヒアリングと活動現場視察を行った。幸重代表は子どもや子育ての支援活動をさまざま展開している。そのひとつは NPO 法人「山科醍醐こどもひろば」での理事長としての活動であり、子どもの居場所の提供、就労支援プログラムの展開を行っている。さらに幸重代表は高齢者施設での被虐待児童の居場所づくりやリービングケアのための早期の中小企業経営者とのつながりをコーディネートするなどの事業展開も行っている。幸重代表の活動から端を発し、わが国においても同様の活動が広がりつつある。

(3) (4) (5) (6) (7) では米国ミシガン州にあるグランドバレー州立大学 Joan Borst 教授のコーディネートの下、ミシガン州での各機関の取り組み等についてインタビュー調査等を実施したものである。(3) では、里親支援サービスを展開する Bethany Christian Services (Holland) を訪問、里親支援のスーパーバイザーでもある Christopher Hulett 氏と現場のソーシャルワーカー 2 名にインタビュー調査を実施した。同時に、本研究についてのプレゼンテーションも実施した。ここでの調査では、里親に委託された子どもためのオンブズマンなど第三者的存在による子どもの権利の保護や、パーマネンシープラン、子どもの意見を聞くための仕組みについて聞き取りを行った。(4) は、グランドバレー州立大学で児童保護に関するソーシャルワークの専門家である George Grant 教授との意見交換、

そして (5) は、児童施設 (ST. JOHN' S) のプログラムディレクターである Renee M. Orr 氏とセラピストの 2 名にインタビュー調査を実施、施設内の視察等を行った。虐待を受けた子どものトラウマに対する取り組み、その治療を受けることのできる子どもの権利、また、14 歳から主に始まるリービングケアについての説明を受けた。パーマネンシーに関する点では、訪問先の施設でもケアワーカーの離職率は高いが、その理由はキャリアアップ等の理由が多く、日本のようにバーンアウト等の理由が少ないことなども明らかとなった。

(6) では、Grant 教授のコーディネートにより裁判所で実施される子どものパーマネンシー検討会他 2 例の傍聴をすることができた。子どもを支援するための決定プロセスが日本とは大きく異なっており、今後の日本の課題であることが明らかとなった。(7) では、児童保護やセツルメントハウスとして世界最大の規模を誇ったジェーン・アダムスが創設したハルハウスを視察した。子どものための居場所づくりや地域づくりを考える上で示唆に富むものであった。

#### ○岩沼市「千年希望の丘」成長シミュレーションの CG 映像製作

##### (概要)

平成 25 年に始まった「千年希望の丘植樹祭」において、市民とともに植えた土地本来の苗木が成長し、どのような森になるのかを CG を駆使したシミュレーションの映像によって表現した。多くの皆様の視覚と心に残る映像であり、本来あるべき森と共生することが、私たちの生命と心と財産を守ることを理解を深める映像である。脳科学者の小泉英明先生や元横浜国大学長の鈴木邦雄先生のインタビューも入れ込み、自然が子ども達の脳に与える影響、横浜国大での植樹活動の歴史などが解るようになっている。本映像のタイトルは「レジェンド・オブ・ザ・フォレスト 宮脇昭 87 歳と木を植える子ども達」である。

本作品は、2015 年度スティービービジネス国際賞のセキュリティ PR 部門においてゴールド賞を受賞した。

様々な機会に上映しており、2015 年 11 月 5 日、内閣府が定めた津波防災の日には、「TOKYO FM HALL」において、公益財団法人 生存科学研究所・一般社団法人 森の防潮堤協会・一般社団法人 日本フィットセラピー協会の三者主催の「津波防災シンポジウム 2015—子どもたちと描く千年希望の未来—」を開催し、上映したところ、多くの皆様の共感を得ることが出来た。

#### ○専門職における批判的判断研究会

##### (1) 美的想像力の育成—教育、医学、ケアの倫理

平成 28 年 3 月 13 日

パリ第一大学教授、哲学、女性哲学とケアの倫理専門

サンドラ・ロジェ

UCL 教育研究所 教授

ポール・スタンディッシュ

小島歯科クリニック院長

小島 静二

京都大学教育学研究科准教授

斉藤 直子

本研究会においては、第一に、医療、教育を中心に、専門職を育成する上での美的想像力、美的独創性の育成における師弟関係や教育のあり方について話し合われた。ある個人が自らの声、その人らしさ、色づかいを發揮できるようになる師との関係とはどのような

ものであるのか。それは、師の偉大さを継承すること（時にはその偉大さの呪縛）と同時に、学ぶ者自身が専門職としてオリジナリティを発揮するという葛藤を背負う教育の課題である。第二に、ケアの倫理に関わり「死の教育」をめぐる現代社会の動向とそこに専門職の美的想像力はいかに関わるべきかについて話し合われた。国際的な対話の場として、グローバル化の世界における全般的な動向および、イギリスと日本のケースが例として挙げられた。スタンディッシュ氏よりは、グローバル化の波の中ですべてが効率化、行為遂行化、数値化され、目的達成の「肯定（正）」的動向が教育を支配する中、イギリスでは死の教育も「生命保険」(life insurance) 志向になっていることが指摘され、死の教育に「否定（負）の経験」を取り入れることの重要性が提起された

○社会歴史文化的要因を背景とするソーシャル・キャピタルと well-being に関する研究会

本研究会の目的は、近年、社会経済、健康科学分野において定着してきたソーシャルキャピタル(社会関連資本)について、特に、公衆衛生・健康学分野から、多面的角度から講師の先生をお招きして、研究者間の共通の理解を図り、わが国の生存科学の進展のための広い内容の討論を行うことを意図している。本研究会は、沖縄在住の研究者が半数近く参加しており、研究会を東京と沖縄で交互に行っている。平成27年度の研究会は東京で3回、沖縄で3回、計6回、演者は9名にわたり開催された。

(1) ソーシャルキャピタルの外部 ―沖縄の風俗業界で働く女性たちの調査から

平成27年 7月22日

琉球大学教育学部准教授

上間 陽子

(2) 奉納演舞じゅり馬 ―シマを復興させた力―

平成27年 9月18日

民俗芸能研究会主宰 春駒じゅり馬演者 芸術学博士

浅香 怜子

社会関係資本としての祭事

元日本大学芸術学部教授 生存科学研究所常務理事 藤原 成一

(3) 健康な生活のために、本当に役立つ食育とは？

平成27年12月11日

東京大学大学院 情報学環

朝倉 敬子

(4) 長野県の保健補導員活動から考える、地域のソーシャル・キャピタルと健康

平成28年 2月19日

東邦大学医学部 社会医学講座衛生学分野 助教

今村 晴彦

(5) 健康生成論とソーシャルキャピタル～関係性の理論的整理

平成28年 3月12日

放送大学教養学部/大学院文化科学研究科准教授

戸ヶ里泰典

食育における中間組織としての家族の役割と可能性 ―沖縄の食育介入研究から見えてきたこと―

琉球大学大学院医学研究科准教授

等々力英美

(6) 歯科疾患の重要性と、地域格差の解消を目指して

平成28年 3月17日

東北大学大学院歯学研究科国際歯科保健分野准教授  
沖縄の学校歯科検診データの解析から見える児童の健康  
東北大学大学院歯学研究科

相田 潤  
長谷 晃広

概要：1回目の研究会は、上間陽子先生にお話をさせていただいた。上間先生は、沖縄の女性における貧困、就労問題、社会的孤立について参与観察のアプローチから精力的に取り組まれており、通常社会学や疫学におけるテーマでは接することのできない、社会の格差のはざまに生活をしている女性たちの生き方について貴重なお話が聞けた。2回目は、生存科学研究所常務理事の藤原先生と、民俗芸能研究会の浅香玲子氏から、これまでの研究会の演者とは異なった視点のお話を聞くことができた。両氏のお話は、我々の医療系サイドの研究者にとっては新鮮であり、日本・沖縄の原風景に立脚した「祭り」の在り方と、人々の関わりが、よく理解できた。講演では、春駒じゅり馬演者である浅香氏のじゅり馬衣装をまわれ講演をしていただき印象的であった。藤原先生の講演では天満祭のビデオをまじえながらお話を戴いた。3回目は、朝倉先生に、食育の在り方について、健康をゴールにした食育を目指すためには、正しい食事・栄養知識と、家族間における対話が前提として必要であり、さらなる科学的エビデンスの蓄積が重要であることを話された。4回目は今村先生に、長野県の長寿性の成立の要因として、保健補導員の存在が大きく寄与し、地域においてどのように活動されているかについて調査結果を基にした内容についてお話をさせていただいた。5回目は、戸ヶ里先生と等々力が講演をした。戸ヶ里先生はAntonovskyにより提唱されたストレス対処力とその基礎理論である健康生成論、健康生成モデルにおいて、ソーシャルキャピタルとの関係性について理論的考察をまじえて講演をされた。等々力は、現在、進行中の沖縄県八重瀬町食育スタディを中心に、その研究から得られた新知見について紹介を行い、特に中間組織としての家族について、それが持つ機能性が、食事摂取に強い関連性があることを示した。6回目は、近年、歯科に関する社会と健康との関係から新たな知見が得られてきており、注目を浴びてきている。「歯科における社会と健康」をテーマに相田先生と長谷先生からお話を頂いた。

#### ○資本主義研究会

##### (1) 資本主義社会における仏教寺院（お寺）の役割

平成27年 4月 9日

未来の住職塾塾長

松本 紹圭

一般社団法人お寺の未来副代表理事

井出 悦郎

##### (2) 幸せと資本主義

平成27年 5月 7日

慶應義塾大学大学院 システムデザイン・マネジメント研究科委員長

前野 隆司

##### (3) 資本主義と女性

平成27年 6月25日

OECD東京センター所長

村上由美子

- ピープルフォーカス・コンサルティング取締役 黒田由貴子
- (4) 経済ジェノサイド  
平成27年 7月23日  
東京外国語大学大学院総合国際学研究院教授 中山智香子
- (5) 『ドーパミン脳』と資本主義  
平成27年10月30日  
首都大学東京大学院フロンティアヘルスサイエンス学域教授 菊池 吉晃
- (6) 資本主義の新しい形—経済の中に倫理を見いだす  
平成27年12月11日  
東京大学 名誉教授 岩井 克人
- (7) 資本主義の進化基盤と未来  
平成28年 2月19日  
評論家・翻訳家・野村総合研究所研究員 山形 浩生
- 生存科学と教育研究会
- シンポジウム：生物進化と文化進化—その普遍性と歴史性  
平成27年10月 3日  
鳥の歌に見られる生物進化と文化進化の相互作用
- 東京大学教授 岡ノ谷一夫
- 類人猿研究から見た社会性の進化  
京都大学教授 平田 聡
- 進化保育学・進化教育への期待  
日立製作所 小泉 英明
- 進化の普遍性と歴史性—情報と時間—  
東京大学名誉教授 養老 孟司
- 助成研究
- (1) 心臓および心臓病に関する研究
- ① 薬物誘発性不整脈症候群の性差機構解明と医療応用  
東京医科歯科大学難治疾患研究所 准教授 黒川 洵子
- ② 心筋老化抑制を主眼とした新たな心不全治療戦略の構築  
自然科学研究機構・岡崎統合バイオサイエンスセンター 西田 基宏
- ③ ノックインマウスモデルを用いた肥大型心筋症の発症メカニズムの解明  
独立行政法人国立循環器病研究センター・研究員 杜 成坤
- (2) 認知症・介護における心理社会的研究
- ① 域在住認知症高齢者のウェルビーイング  
東京都健康長寿医療センター研究所研究員 井藤 佳恵
- ② 認知症家族介護者の介護負担感の特徴とその関連要因2  
東京都健康長寿医療センター精神科 臨床心理士 扇澤 史子

- ③若年認知症の人の診断直後の非薬物療法の受け皿  
医療法人 藤本クリニック 藤本 直規
- ④知覚・感情・言語による包括的ケア技術の実践応用とその効果  
国立病院機構東京医療センター 本田美和子
- ⑤認知症ケアの限界を超える研究  
千葉大学医学部附属病院地域医療連携部 特任准教授 上野 秀樹
- ⑥認知症医療・介護における法的問題について  
上智大学法学部法律学科教授 奥田純一郎
- ⑦日本の認知症施策への提言を目指す研究（別紙2） 繁田 雅弘

(3) その他

- ①福島第一原発事故後のリスクコミュニケーション向上：ヘルスリテラシー推進に関する要因の分析および保健医療従事者向けの指針作成  
福島県立医科大学医学部公衆衛生学講座 後藤 あや

シンポジウムの開催

(1) 津波防災シンポジウム 2015 「子どもたちと描く千年希望の未来」

(公益財団法人生存科学研究所・一般社団法人日本フィットネス協会・一般社団法人森の防潮堤協会主催)

平成27年11月 5日 於：東京FMホール

基調講演

植生・地形による減災効果 東北大学災害科学国際研究所所長 今村 文彦  
脳と心を育む植樹(Ⅱ) 日立製作所フェロー 小泉 英明  
「私」と生物 東京工業大学名誉教授 本川 達雄

第1部：宮城県岩沼市「千年希望の丘」という挑戦

(1) 総延長10キロへの道のり

「千年希望の丘」とは 岩沼市長 菊地 啓太

海岸林再生とふるさと復元

横浜国立大学前学長 鈴木 邦雄

復興と復旧の違い (公財)瓦礫を活かす森の長城プロジェクト 新川 眞

遺伝的地域性を考慮した植樹

東北大学大学院農学研究科准教授 陶山 佳久

(2) 新たな挑戦

緑の防潮堤について 国土交通省東北地方整備局副所長 奥山 吉徳

復興支援の苗木づくり (株)三五 総務室総務課環境・広報グループ 高野 薫

鮎屋が木を植える理由 株式会社アミノ代表取締役社長 上野 敏史

岩沼復興アグリツーリズム

「千年希望の丘」岩沼復興アグリツーリズム協議会 谷地沼富勝

第2部：子どもたちと描く千年希望の未来

ライブ 「千年希望の丘」 熊谷育美&中村マサトシ&伊東洋平

岩沼に行こう！ 俳優 宮城県岩沼市健幸大使 西村 雅彦

子供たちの苗木づくり

NPO法人どんぐりモンゴリ事務局（東北支援担当） 村松 秀子

高校生が描く東北産業復興

減災産業振興会 仁禮彩香 齊藤瑠夏

いのちのエール 小説家 田口ランディ

東北の子供たちとのコラボ曲 グローパス・フレンズ・ライブ

「千年希望の丘」に花は咲く 尚美学園新・合唱集団「匠」ライブ

(2) 第3回生存科学シンポジウム

(公益財団法人生存科学研究所、公益信託武見記念生存科学研究基金共催)

平成27年12月12日 於：一橋大学一橋講堂

「未来への懸け橋—よく生きるための倫理をひもとく—」

基調講演：生命文明における生存科学

上智大学名誉教授 青木 清

講演1：21世紀の科学技術のあり方

日立製作所フェロー 小泉 英明

講演2：環境倫理の過去・未来

哲学者・京都大学名誉教授 加藤 尚武

講演3：修復医学に学ぶ生命倫理

東京大学名誉教授 浅野 茂隆

講演4：会える別れと会えない別れ

大正大学講師・浄心寺住職 佐藤 雅彦

(3) 市民公開シンポジウム

(公益財団法人生存科学研究所主催・東京慈恵会医科大学アトリーチ活動推進委員会共催)

平成27年12月20日 於：東京慈恵会医科大学・大学1号館・3階講堂

医師と共に考える「いのちの授業」

基調講演：生命文明における生存科学

北陸学院大学人間総合学部幼児児童教育学科教授 金森 俊朗

講演1：新生児医の立場から

神奈川こども医療センター新生児科 豊島 勝昭

講演2：ターミナルケアの立場から

めぐみ在宅クリニック 小澤 竹俊

講演3：発展途上国支援の立場から

ジャパンハート代表

吉岡 秀人

講演4：臓器移植の立場から

東京女子医科大学小児循環器科

中西 敏雄

パネルディスカッション

モデレーター：南沢享 東京慈恵会医科大学 + 金森俊朗 北陸学院大学

上記講演者

上智大学名誉教授・人間総合科学大学名誉教授

青木 清

映画監督

伊勢 真一

内閣府大臣官房審議官（科学技術・イノベーション担当）

中川 健朗（

(4) 市民公開講座 よいケアとは何かを考える

(公益財団法人生存科学研究所、独立行政法人 国立病院機構東京医療センター共催)

平成28年 1月21日 於：日経ホール

基調講演：フランスの介護施設におけるケア —ユマニチュードの導入とその成果

EHPAD Les Jardins Du Rival 老年医学科長

カンディダ・デルマス

シンポジウム：よいケアとは何かを考える

講演1：ケア実践の場からの報告

株式会社あおいけあ代表取締役社長

加藤 忠相

講演2：ケアの実践者を育てる教育

聖路加国際大学学長

井部 俊子

講演3：平穏死の視点から考えるよいケア

特別養護老人ホーム・芦花ホーム 医師

石飛 幸三

総合討論司会 東京都健康長寿医療センター

伊東 美緒

ジネスト・マレスコッティ研究所

イヴ・ジネスト

学術誌「生存科学」の発行

(1) VOL. 26-1 2015

(2) VOL. 26-2 2016

3. 一般的運営について

本年度の自主研究は①医療政策研究会（Ⅱ）、②高齢者・障害者のユニバーサル・ヘルス・ケアと福祉・社会保障の研究、③動物の社会構造における精神疾患関連行動の意義、④児童虐待に対するソーシャルワークの国際比較研究、⑤岩沼市「千年希望の丘」成長シミュレーションのCG映像製作、⑥専門職における批判的判断研究会、⑦社会歴史文化的要因を背景とするソーシャルキャピタルとwell-beingに関する研究会、⑧資本主義研究会、⑨生存科学と教育研究会の合計9件が活動した。各研究会は活発に行われ、外部研究施設と

の交流も盛んであった。医療政策研究会（Ⅱ）は『院内事故調査実践マニュアル』を出版した。

助成研究は（1）心臓および心臓病に関する研究、（2）認知症・介護における心理社会的な研究、（3）その他の3つのテーマにつきホームページによる公募を行い、それぞれ3件、7件、1件を選考した。日本の認知症施策への提言を目指す研究では『認知症と共生する社会に向けて—認知症施策に関する懇談会報告書（別紙2）』が作成された。その他のテーマは東日本大震災後の福島第一原発事故後の支援が目的であり、福島県立医科大学医学部公衆衛生学講座 後藤あや准教授によるリスクコミュニケーション向上：ヘルスリテラシー推進に関する要因の分析および保健医療従事者向けの指針作成である。

シンポジウムは①公益財団法人生存科学研究所・一般社団法人日本フィットネス協会・一般社団法人森の防潮堤協会主催による津波防災シンポジウム2015「子どもたちと描く千年希望の未来」、②公益信託武見記念生存科学研究基金との共催による第3回生存科学シンポジウム「未来への懸け橋—よく生きるための倫理をひもとく—」、③公益財団法人生存科学研究所主催・東京慈恵会医科大学アトリーチ活動推進委員会共催 市民公開シンポジウム医師と共に考える「いのちの授業」、④公益財団法人生存科学研究所・独立行政法人 国立病院機構東京医療センター共催、市民公開講座「よいケアとは何かを考える」を開催した。それぞれ反響が大きく、継続的なテーマで行うシンポジウムでは、参加人数が年々安定的に増加し、「生存科学」という概念の社会への浸透がさらに進んだ1年であった。

学術誌「生存科学」は会員のほか、国会図書館、全国医学部図書館など公共性の高い機関に無料配布、メディカルオンラインへ登録し、各大学図書館からのアクセスを可能にしている。本年度は日本学術会議より学術研究団体としての指定を受け、日本学術会議のホームページからも生存科学研究所ホームページへのアクセスが可能となった。